

ひょうたん島通信

大槌発! 第43回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



ひょうたん島の“ありがたい”磯

弁天様が見守る蓬萊島の磯。

大土直哉 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
生物資源再生分野 特任助教

今年2月から国際沿岸海洋研究センターに特任助教として着任したオオツチです。お気づきの通り、姓が大槌と同じ音ですが、私のツチは土曜日の「土」、つまりグランメーユ (Grand Maillot) ならぬグランテール (Grand Terre) です。私の着任後まもなく、沿岸センターは旧研究棟よりもやや陸側の高台に移転しました。海側の居室からは、蓬萊島を含む、大槌湾湾央の風景が一望できます。しかし、残念ながら、眺望の良さと海岸の近さは往々にしてトレードオフの関係にあります。新研究棟の玄関を出てから船着場までは徒歩で5分、蓬萊島の磯まではさらに5分——臨海研究施設にしてはすいぶん海岸から離れた気がします。

とはいっても、三陸南部沿岸域において、いつでも歩いて行ける場所に磯がある、ということは、とても「ありがたい」ことなのです。なぜなら、三陸南部には、地質の特徴のせいで、アクセスしやすい磯がもともと非常に少ないからです。例えば、三浦半島は、およそ1700万年前に出来た日本で最も新しい付加体ですが、これを構成するのは主に砂泥や火山噴出

物からなる堆積岩、つまり比較的脆い岩石です。このような岩石でできた岩場は、波浪で削られやすく、実際、半島の沿岸には無数の海食台が形成され、老若男女の磯遊びの場となっています。一方、

三陸南部沿岸はおよそ4億4000万~1億2000万年以上も前の、日本で最も地質年代が古い地域。石灰岩や花崗岩など非常に堅い岩石が削られて出来たリアス式海岸ですので、よほどの力がかからない限り地形は変わりません。海岸線はほとんどが崖で、磯があったとしても崖崩れの跡のような危険な場所ばかりです。大槌・釜石の沿岸も、このような磯のできにくい地域にあるため、私は、実際に訪れるまで、沿岸センター周辺で潮間帯の調査はできないものと思込んでいました。でもありがたい磯はあったのです！ところが『東京大学海洋研究所国際臨



海研究センター報告』のバックナンバーに、蓬萊島の磯に関する研究事例は見当たりません。「赤浜の東大」こと沿岸センターが、赤浜のシンボルである蓬萊島を調べていないのは、とても意外に思えます。今年度は、一般向けに公開する展示室の開館も控えていますので、これからは身近なものにこそ関心を持っていただければならないでしょう。このことに着任早々に気づけたことを幸運だったと思って、近い将来に、この小さな磯から「ひょうたん島の自然誌」をみなさんにご紹介できるように、今後も調査を継続していきたいと思っています。

調査船「弥生のつばやき」

新たな船出

待ちに待った新センターがついに完成しました。係船場の工事が先行したため、これまでは我々だけでしたが、震災から7年を経てようやく教職員一同揃っての新たな船出となりました。引っ越し作業の終わった旧センターは、ひと気も絶えてひっそりと静まりかえっています。この建物は1975年2月に竣工していますので、実に43年の長きにわたり日本の沿岸海洋研究の一翼を支えてきたことになります。我が国の著名な海洋科学者にも、

大槌での日々を青春の1頁に刻んだ方も少なくありません。私には想像することしかできませんが、優秀な若者たちが自ら海へ出て、新しい知見を見いだす時、そこには途方もない熱気や感動が生まれるでしょう。そうしたエネルギーの全てを、この建物が受け止めてきたのだと思うと感慨もひとしおです。東日本大震災によって被災した国際沿岸海洋研究センターは、一つの時代の幕を閉じることになります。2018年度より始まった新たな歴史が、これまで以上

に長く、熱く、全ての人たちに感動を与えるものになることを願ってやみません。



強者どもが夢のあと。現状では取り壊しの日程も未定です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

